

伊日財団は、今年、設立後、十年を迎えます。イタリア日本友好協会と共に、外務省は財団の誕生から創設会員として対等に参加しており、財団の会長を任命し、理事会の3人の理事を指名する特権を有します。

この機関が2巡目の十年を開始するという、まさしくこの時期、イタリア共和国大統領が公式来日します。さらに、日出ずる国葉、4ヶ月の間、再び大きな国際的なショーウインドーとなります。このショーウインドーを通じて、イタリアの文化、芸術、観光の比類ない魅力の紹介と連結した形で、第一級クラスの産業や科学、技術を紹介するという「イタリアのシステム」の総合的プロモーションの路線を続けていく予定です。

それゆえ「日本におけるイタリア2009年」は、イタリアがこの国で実現した「日本におけるイタリア年2001年-2002年」や、より最近の「イタリアの春2007年」という大きなイベントを、理念的に受け継ぎ、さらに発展させたものなのです。

これまでのこのようなイニシャチブのおかげで、イタリアにとって新しい局面が開かれ、新しい機会が生まれました。今、これらの局面や機会を利用し、一般的にアジア全域や世界の他の多くの地域において模範となるような傾向を開始する日本という国において、我々の活動を継続していかなければなりません。

これらに劣らず重要な他の目標があります。それは観光面における供給の強化です。小さなコミュニティのように異なる現実や経験にまで範囲を広げることで、地方の文化や産物に注意を払う、いわゆる近隣の観光という進化した観光に力を入らなければなりません。それに日本人は、我が国の景観の美しさや芸術的な遺産にだけ惹かれているわけではありません。人間大の多くの芸術都市や独特なボルゴにも魅力を感じているのです。

伊日財団は、この十年間に熱意と情熱にあづれ、人々を参加させる活動を通じて、素晴らしい成果を獲得しました。こうした成果は、これまでに歩み始めた道を継続し、二国間関係のその潜在能力に相応した発展をめざす方向を継続しなければならないということを、私たちに確認させるものなのです。多くの類似点や数々の補完し合う面を持つイタリアと日本において、その潜在能力はまだ探求し尽くしたとは言えないのです。

伊日財団は、公共機関と民間企業間の効率の良い協力体制という革新的方法を実験・採択し、多数の友好的な日本の方々の貴重な貢献を得ました。これらは集団的な努力が勝利する上で決定的決め手となるカードであったと言えます。今、さらに明確で効果的な取り組みを行うことで将来に結び付けていかなければなりません。こうした取り組みを新しい分野や新しい人々に拡張すること、その実現に向かって私たちは全力を尽くすつもりです。

フランコ・フラッティーニ  
外務大臣